

日本音楽学会 第 75 回全国大会  
11 月 10 日 (日) 16 : 15 ~ 16 : 55 研究発表 N-2

題目：エドガー・ヴァレーズにみる打楽器の表記方法と実演例

The percussion notation and performance examples of Edgard Varèse

発表者：中原朋哉 シンフォニエッタ 静岡 芸術監督・指揮者

音楽事務所 合同会社シンフォニエッタ 代表社員

博士 (文化政策学 / 京都橘大学)

京都橘大学大学院 文化政策学研究科 博士後期課程修了

静岡文化芸術大学大学院 文化政策研究科修了 (修士課程)

## 要旨

19 世紀末になると様々な打楽器がオーケストラに持ち込まれるようになった。例えば C. ドビュッシーや M. ラヴェルはアンティーク・シンバルを持ち込んだが、ラヴェルはこれを古代の金属製カスタネットであるクロタル *Crotales* と誤解したことから、現在では (特に鍵盤上に並んだ) アンティーク・シンバルをクロタルと呼ぶことが一般的になっている。このように作曲家の誤解による打楽器名の表記は、演奏者を混乱に陥れるものであり、作曲者が望んだ音が再現されない可能性もある。

ドビュッシーやラヴェルと同時代のエドガー・ヴァレーズ *Edgard Varèse* (1883-1965) もまたオーケストラに多数の打楽器を持ち込み、11 人の打楽器奏者を必要とする《アメリカ *Amériques*》(1927 年改訂版) や、西洋音楽史上初めての打楽器のみによる作品とされる《イオニザシオン *Ionisation*》を残した。このヴァレーズにおいても、後世の演奏家がどのような楽器を使用すべきか判別できないものや、不正確な表記が散見されることから、実演に向けた楽器の選定において混乱が生じ、結果として作曲家の望んでいた響きが明らかにならないこともある。

ヴァレーズに関する研究は、沼野雄司 (2019) や *Odile VIVIER* (1973) があるが、作品とその背景を中心にまとめたものであり、作品において指定した打楽器が具体的にどのようなものを求めているのかについては言及されていない。また、作曲家による打楽器の表記法、表記と実物との相違に関する研究や、作品を演奏した団体がどのような打楽器を使用したのかを記録し、公表しているものも見当たらない。

そこで、ヴァレーズが打楽器を使用した全ての作品において、どのような楽器を求めているのか不明なものや、楽譜上の誤記や複数の言語間における表記の矛盾をあぶりだし、ヴァレーズが立ち会ったとされる初演時の録音や資料、近年の実演における記録から、今後の再演に際して適切な楽器を明らかにする。

## I. はじめに

楽譜に記された打楽器には作曲家の誤解によって、どのような楽器、どのような音を求めているのかわからないことがある。これは打楽器を多く用いるようになった近現代の作品においてはしばしばみられることであるが、既に演奏した団体がどのような楽器を使用したのか、楽譜上の誤りを示した記録はほとんど残されていない。その理由として、事前に使用する楽器を決めてもリハーサルにおいて指揮者や演奏者のイメージと異なるとして公演では違う楽器に変更になることや、この問題に直面した当事者が再び同じ作品を演奏するとは考えていないこと、同じ作品を演奏するとしても指揮者や演奏団体が異なれば異なる楽器になる可能性もあることから記録として残しておく必要がないと考えていることが推察される（実態としては、そこまでしている暇がない、終わってしまえばそれまで、といったところであろう）。

発表者が企画・制作・指揮をしたシンフォニエッタ静岡とのオール・ヴァレーズ・プログラム（2023年10月5日三鷹市芸術文化センター）においても、どのような打楽器を要求しているのか判断が難しく、打楽器奏者と議論を重ねた。一人の作曲家の、複数の作品に同時に触れることで、その作曲家がどのように勘違いをしていたのかが見えてきた。そこで、記録を残しておくことが今後ヴァレーズ作品を演奏しようとする団体の参考となると考え、また、今後ほかの作曲家においても同様の記録が残されていくことを期待し、本発表をするに至った。

本発表では、ヴァレーズが打楽器を使用した全ての作品を取り上げる。打楽器の使用について問題点が指摘される作品のうち、発表者が指揮をした2023年10月5日シンフォニエッタ静岡第75回定期公演「オール・ヴァレーズ・プログラム」（三鷹市芸術文化センター）において取り上げた作品については、どのような楽器を使用したのかを示す（**実演例**と記す）。

なお、本稿は日本音楽学会での発表のために作成しているため、打楽器奏者や指揮者にとっては常識的な内容を含む。

### Edgard Varèse

エドガー・ヴァレーズ（1883年12月22日パリ～1965年11月6日ニューヨーク）

日本での著作権は消滅している。

## II. ヴァレーズの全ての作品に共通してみられる問題点

### ① Crash cymbal (英語) と Cymbale chinoise (仏語) が同じ楽器とされている。

「合わせシンバル」と「チャイニーズ・シンバル (吊るしシンバルの一種)」であり、これらは全くの別物である (実物を確認)。他の作曲家でこのような間違いを見たことはなく、ヴァレーズ作品において、なぜこのような間違いが起きたのかはわからない。日本の祭りで見られるチャップに似た中国の伝統的な小型の合わせシンバル (手のひらほどの大きさのもの) のことを指している可能性も考えられるが、その場合には「Chinese crash cymbal」と書かれるはずである。また、《Ameriques》と《Intégrales》では Bass drum に取り付けることが求められており、《Intégrales》では 18 インチの指定があることから、小型の伝統楽器 Chinese crash cymbale とは考えにくい。手のひら程度の小さなシンバルを Bass drum の上に取り付けた場合には、演奏が著しく困難になることに加え、そもそも取り付けられるのかという問題も生じる。さらに、あらゆる作品にこの Cymbale chinoise が登場することから、通常吊るし型の Cymbale chinoise よりも一層特徴的な音色を持つ伝統楽器の使用によって、作品それぞれの特徴が聞こえにくくなるということも検討しなくてはならない。

一般的には、Cymbales frappées=Crash cymbal、Cymbale chinoise=Chinese cymbale、Cymbale suspendue=Suspended cymbal である。なお、2 Cymbales あるいは数字を書かずに複数形で Cymbales としている場合には Cymbales frappées (Crash cymbal)、あるいは 2 枚の Cymbale suspendue を演奏する可能性が検討される。その判断は音色、前後の楽器との持ち替えといったことからする。

**実演例** 原則として 2 cymbales を Crash Cymbal とした。Cymbale chinoise (Crash cymbal) は Cymbale chinoise で演奏した。ただし、前述のとおり、《Ameriques》や《Intégrales》のように Bass drum にシンバルを取り付けることが要求されている場合には、Crash cymbal (Cymbale chinoise) は Crash cymbal と判断する。これは、Bass drum に Cymbale chinoise を取り付けるのであれば、Cymbale chinoise をバチで叩くことになり、Bass drum に取り付ける意味がないことによるものである。なお、楽譜に記されている Bass drum に Cymbale chinoise を取り付けた図では、シンバルが一般的な取り付けとは逆向きになっている。

### ② 小太鼓、中太鼓に相当する、Snare drum, Side drum, Field drum, Tenor drum, Caisse claire, Tambour militaire, Caisse roulante が作品によって混同されている。

作品によって使用される楽器とその組み合わせが異なる。楽器名によって Snare (響き線) の ON, OFF を楽器名で区別しているつもりであろうが、いずれも響き線が付いていることが一般的であることから混乱の原因となる。《Ionisation》で見られるように (detimbrée)=snare off と記すと混乱は少ない。

楽器名は以下のように小太鼓と中太鼓に分けられる。

小太鼓: Snare drum = Side drum = Caisse claire

中太鼓 (深胴): Field drum = Tenor drum = Tambour militaire = Caisse roulante

網代・岡田は「caisse roulante にはスネアのあるものと、ないものがあるのでスネアなしとかスネアありなどの明記のないものは、その使用にあたって、音楽的な考察を要する」と述べている（網代・岡田 1981、p.176）。

**実演例** 複数のヴァレーズ作品を演奏することから、全体の統一感を持たせるために原則として以下のようにした。この演奏会では取り上げなかったが、例えば《Ionisation》の第4パートでは Tambour militaire と Caisse roulante の両方を演奏することから、別の楽器と判断する材料とした。

小太鼓：Snare drum、Caisse claire =Snare ON（響き線あり）

Side drum =Snare OFF（響き線なし）

中太鼓：Field drum、Tambour militaire =Snare ON（響き線あり）

Tenor drum、Caisse roulante =Snare OFF（響き線なし）

### ③ Tam-tam と Gong を同一とみている場合と、異なる楽器と認識している場合がある。

これは多くの作曲家が間違えている代表的なものである。網代・岡田は、「区別は明確ではないが、一般的には、ゴングは東南アジア系で、中央に丸みを帯びた突起があるものをさし、中央が平らな中国系のタムタムと区別をしている。しかし、ゴングとは、すべて突起のあるものだけをさすのではなく、平面で円盤状のものであり、多種多様で、その区分にはっきりした定義があるわけではない」と説明しているが（網代・岡田 1981、pp.93-94）、一般的に Tam-tam の表面は平らなもの、Gong は中央部にヘソ（突起）があるものをいう（図1）。演奏者にとって、Gong は2オクターブの音階が演奏できるようになっているものとして考えており、単音あるいは3つ程度の楽器を使用する場合には、その中から作品で求められているであろう音の高さを想像して選んで演奏しているのが実態である。

**実演例** 作品ごとに他の楽器との音色の組み合わせといったバランスをみていずれかを判断した。Tam-tam（Gong）として1つの楽器だけを使用する場合にはいずれかを、複数の楽器を使用する場合には、作品ごとに打楽器奏者間、あるいは指揮者との間で協議をした。

（図1）Gong（左） と Tam-tam（右）



野中貿易ホームページ [https://www.nonaka.com/catalog/pdf/concertpercussion\\_c.pdf](https://www.nonaka.com/catalog/pdf/concertpercussion_c.pdf)（最終閲覧 2024年10月27日）

### Ⅲ. 作品ごとの事例 (作曲年順で、打楽器を使用している作品のみを紹介する)

#### 1. <sup>アメリカ</sup>Amériques (アメリカ/アメリカ大陸) 1920年(作曲)、 打楽器の表記=英語(フランス語)

##### ① Sleigh Bells (Grelots)

Hyperprism や Integrales のスコアに図で示されているように、Sleigh Bells と Grelots を同一楽器としてよいか疑問がある。実物を確認

##### ② (参考) Low Rattle(Crécelle) affixed to a solid base

日本で購入するのは困難。ドイツのメーカーが製作しているが、必ずしも音量が大きいわけでも音程が低いわけでもない。

##### ③ Gong (Tam-tam)

##### ④ (参考) Celesta

フランス音楽では打楽器奏者が演奏することが想定されており、打楽器に分類される。

##### ⑤ Crash Cymbale (Cymbale chinoise) attached to Bass drum

Crash Cymbale と Cymbale chinoise では楽器が異なる。実物を確認

Crash Cymbal は Cymbales frappées と表記されなくてはならない。

Bass drum に Cymbal を取り付ける場合は必然的に Crash Cymbale になる。

※ この後でも見ていくように、ヴァレーズ作品の全てにおいて Cymbale chinoise を Crash Cymbal と間違えている。ヴァレーズの問題か、出版社に問題があるのかは定かではない。

##### ⑥ Snare drum (Tambour militaire)

楽器が異なる。Snare drum は響き線を持つ小太鼓。Tambour militaire は Snare drum よりも深胴の響き線を持つ小太鼓(中太鼓)である。実物を確認

#### 2. <sup>オフランド</sup>Öffrandes (捧げもの) 1921年、打楽器の表記=英語(一部ドイツ語)

##### ① (参考) Ratsche ラチェット これだけドイツ語表記。

##### ② (参考) Bass drum (Mammoth) ヴァレーズ独自の表記。サイズ指定はない。

##### ③ (参考) 2 Gongs 音が指定されるべきである。

**実演例** 8名で演奏(《パイパープリズム》のために9名の奏者がいたので各楽器1名)

#### 3. <sup>イベルプリズム</sup>Hyperprism(ハイパープリズム) 1923年、

打楽器の表記=A:フランス語のみ/英語 B:英語のみ

A=いわゆる初版。打楽器は7名で演奏できるような書き方をしているが、実際には何人で演奏できるのかよくわからない。

B=Richard Sacks (アメリカの打楽器奏者) による改訂版 (1986 年) 9 人または 10 人の打楽器奏者で演奏できるように編集されている。

### ① Tambour Indien

インディアン・ドラムには胴の浅いものから深いもの、ヘッドの大きさなど様々な種類があり、どのような楽器を想定しているのか不明である。インディアン・ドラムは、ネイティブ・アメリカン・ドラムを指す場合もあり、判断が難しい。

**実演例** 2023 年 10 月シンフォニエッタ静岡の公演では深胴のインディアン・ドラムを使用。プロフェッショナル・パーカッションでレンタル (図 2)。

(図 2) インディアン・ドラムの種類 (右はネイティブ・アメリカン・ドラムとも)  
演奏では深胴を使用



写真= (左、中央) プロフェッショナル・パーカッション <https://www.pro-per.co.jp/>

(右) Shutterstock Traditional Indian Drum Isolated On White Stock Photo 585148894 | Shutterstock

(最終閲覧 2024 年 10 月 27 日)

### ② 2 Cymbales

2 つの解釈ができる。

【1】 Crash cymbal=Cymbales frappées

【2】 Cymbale suspendue 2 枚をバチで叩く。 **実物を確認**

他の作曲家を含め、この表記では【2】と解釈する場合が多い。

**実演例** 別稿のスコア(英語表記のみ)には、PLAYER 5 Suspended Cymbal(Cymbals Chinoise ←フランス語ではなぜか複数形)とあることから通常の Suspended Cymbal を使用した。PLAYER 9 には 2 Crash Cymbals とあることから (2 組と読めるが、PLAYER 9 という一人の奏者が 2 組の Crash Cymbal を演奏することはできないことから) 2 Crash Cymbals とは 1 ペアと解して演奏した。

### ③ Enclumes (Anvil)

Enclumes とは金床 (ルール・アンビル) であるが、ヴァレーズは英語版のスコアの図にあるように、鉄パイプを指定している。 **実物を確認**

**実演例** 鉄製のパイプの中から、スコアに指示されている長さ 9 インチ 15A (直径 15 mm) の水道管を使用した。

(再) Cymbale Chinoise (Crash Cymbal)

Tam-tam (Gong)

Grelots (Sleigh bells) (既出の作品を参照)

#### 4. <sup>アルカナ</sup> Arcana 1927 年、打楽器の表記=フランス語(英語)

##### ① Caisse roulante (side drum)

Tanbour militaire (snare ON)と同じものを指す場合が多い。本作品では英語で(side drum)とあることから(しかし side drum は Caisse claire=Snare drum の snare OFF)、Tanbour militaire (Tenor drum) の snare OFF と判断する。

##### ② Cloches(bells)

Cloches は Tubular bells、Chime を指していることが多く、英語での Bells は Glockenspiel を指していることがあるので注意が必要。本作品には別に Glockenspiel があることから、Tubular bells と判断することができる。

##### ③ Cymbale Chinoise (Chinese or Crash Cymbal)

別のパートに Cymbals とあることから、Cymbals は Crash を指していると考えられ(しかしフランス語表記の e が抜けている点に注意)、Chinoise は Crash ではないと考えられる。

#### 5. <sup>アンテグラル</sup> Intégrales(積分) 1928 年、打楽器の表記=フランス語(英語)

##### ① Verges (Rute) Twigs (Wire Brush) … Verges と Rute は何語?

Rute, Twigs=枝・小枝、Wire Brush=ワイヤー(鉄製)のブラシ **実物を確認**

W.A.モーツァルト、G.マーラーの作品では Rute が用いられる。

Twigs と Wire Brush では矛盾が生じている。

Twigs (Wire Brush) - To be played on shell of Bass drum から見ると Twigs が正しい。**実物を確認**

**実演例** Wire Brush では音が聞こえないことから Twigs を使用した。

※ 打楽器の配置図は2つともヴァレーズによるものではないようである。

**実演例** 4パートで書かれているが、《Hyperprism》のために9名の奏者がいたため、各パート2名ずつの8名で分担して演奏した。

#### 6. <sup>イオニザシオン</sup> Ionisation(電離) 1931 年、打楽器の表記=フランス語(セッティング表のみ英語)

① (参考) Cencerro はスペイン語で Cowbell のこと。O.メシアンは Cencerros と複数形。

② (参考) Caisse claire(detimbrée = Snare OFF) →他作品とは異なり、Snare OFF の

Caisse claire を指すと考えられる Side drum は用いられていない。Caisse claire とだけの表記されているパートは Snare ON と推察。

## 7. <sup>エクアトリアル</sup>Ecuatorial(赤道地帯) 1932 年、打楽器の表記=英語のみ

Gong の音名指定がない以外問題はない。

次の《砂漠》までに以下の作品があるものの、弟子のチョウによりヴァレーズの没後に補筆完成されたものであること、チョウの個性が強いことからヴァレーズの作品とするには課題があることから除外する（沼野 2019、p.341 ほか）。

- ・ 「空間」のためのエチュード(1930-1940 年代)
- ・ チューニング・アップ(1947)
- ・ バージェスの踊り(1949)

## 8. <sup>デザート</sup>Déserts(砂漠) (1954) 打楽器の表記=英語のみ

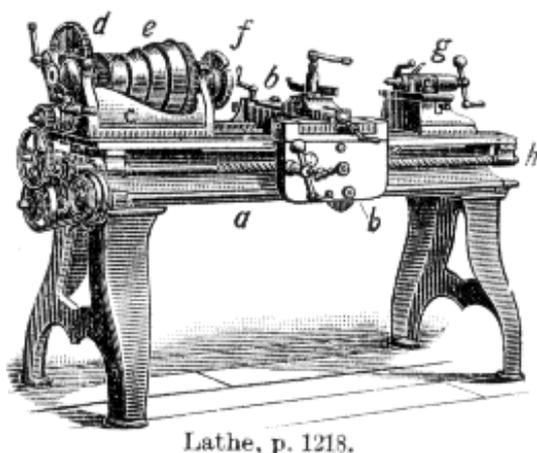
① (参考) 4Timpani → 5 Timpani の間違い

② Snare drum, Field drum, Side drum

**実演例** Snare drum(Snare ON), Field drum(Snare ON), Side drum(Snare OFF)と判断。

③ 2 Lathes (旋盤) 旋盤は工作機械そのもの (図 3)。基本的には床の上、あるいは机の上  
に置かれている。演奏指示として、スコア p.38 に on hard surface、p.39 に on pad、p.43  
には高音が on soft surface、低音が on hard surface、p.71 には高音が on soft surface、  
低音が on leather cushion との指示がある。

(図 3) 旋盤



Lathe, p. 1218.

Lathe 旋盤



卓上旋盤

ウィキペディアより引用 <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%97%8B%E7%9B%A4> (最終閲覧 2024 年 10 月 27 日)

**実演例** ブレーキドラムではないかとの意見が出たが、アンビル (ルール・アンビル) を用いた。

④ 3 Wooden drums (Dragon Heads) ヴァレーズ作品における最大の謎

ウェブ上で検索をかけたが、Wooden drum すらそれらしい楽器 (3つの音高が異なるもの) は出てこない。楽器選定の条件として、3つ以上の音高があること、Xylophone、3 Chinese Blocks と連続した演奏と音色が考慮されなければならない。

【検討した内容】

1. Xylophone、3 Chinese Block の音色に近い Wood Block ではないか。  
課題：それぞれの音色の変化を望めるか。
2. 網代・岡田 (1981) には、似た楽器として Wooden tom-tom の記述があるものの、「現在一般には販売されていない」と記されている (網代・岡田 1981、p.18)。  
課題：入手困難。Dragon heads をどのように解釈するのか。
3. **実演例** 読売日本交響楽団 (2010年7月8~9日) では「木製のドラム」ということで木製の胴で作られた Snare drum が使用されたそうである。  
課題：Snare drum との違いはどうするのか。3台の Snare drum の音色の変化は求められるのか。
4. ドラゴンボートレースというドラゴンの頭をかたどった船の漕ぎ手が息を合わせるために使う太鼓か。  
課題：3台の楽器を使うには大きすぎて Xylophone、3 Chinese Block との連続演奏は困難。
5. 太鼓の革 (打面) は Heads と呼ぶことから、Dragon をへびと解釈し、蛇革を貼ったジャンベではないか。  
課題：音量が不十分である。→「もう Dragon heads のことは諦めよう」

**結論** ログドラム (スリットドラム)

根拠：初演時の録音で聞こえる音色。音高が3つ以上ある。

しかし、リハーサル開始約10日前に指揮者 (発表者) が、ログドラムは一般的に音量が弱い。Wooden drums の指定音量は *f* であるため、Xylo, Chinese Blocks との音量差が出てしまうとして、ログドラムとの決定を撤回。指揮者の再検討し、決定することとなった。

**実演例** 3つの箱馬を使用した。ホールにある箱馬を叩いてみて音高の違いがあったことから、3つの箱馬を選択し、Xylophone とほぼ同じ高さに調整して使用した。

※ 公演後にドイツの楽器メーカー Kolberg に「木製のトムトム」があることがわかった。

9. <sup>ノクターナル</sup>Nocturnal 1961年、打楽器の表記=英語

① Snare drum, Field drum, Tenor drum (Side drum)

他作品と比べて Tenor drum と Side drum を混同している。

Side drum は Snare drum の Snare OFF としているものが多い。

**実演例** Snare drum = (Snare ON) , Field drum = (Snare ON),  
Tenor drum(Side drum) = Tenor drum (Snare OFF) で演奏。

② 5 Wooden Tubes

どのような楽器なのか不明。竹筒のようなものが想定される。また、これまで Blocs chinoise と表記していたものを、ここで初めて Temple Blocks と記している。

**実演例** Temple Blocks を使用。

(参考) 遺作となるこの作品になって初めて登場する打楽器

① Wood Blocks, ② Flexatone, ③ Bongo, ④ Metal Sheet, ⑤ Wooden Tubes (⑥ Temple Blocks でも可 = この表記も初めて。これまでは Blocs chinois) 以上 6 点。

このうち、弟子のチョウが補筆した部分で初めて登場する楽器として③ Bongo がある。

**実演例** (参考) この作品は未完で終わり、後半部はチョウが補筆完成させた。前述のとおり、チョウが作曲した部分についてはチョウの個性が強く、ヴァレーズらしくない点が散見されたことから、2023 年 10 月 5 日の日本初演時にはヴァレーズが作曲した部分までで演奏を終えた。

#### IV. まとめ

ヴァレーズに限ったことではないが、近現代の作品において、スコアには誤字、誤記が多く、表紙の後に続く楽器編成は正確であることのほうが少ない。それが作曲者本人による間違いなのか、出版社のミスなのかの判別はつかない。表記における誤りや言語間における矛盾については、出版社や校訂者が楽器そのものをよく知らないといったことが推察されるが、「作曲家であれば楽器のことくらいは間違えないだろう」と考えることもまた間違いのもとである。作曲家による勘違いは実に多く、演奏法においても何を意図してそのような奏法を指示しているのか、音が聞こえないような指示も頻繁にみられることから、演奏者にはこれらを演奏の実態に合わせて、また楽器を傷めないようにといった配慮をしながら対応することになる。

本発表で示したヴァレーズに限っては、フランスからアメリカに帰化したヴァレーズ、校訂に携わった中国出身でアメリカに移住した弟子のチョウ・ウェンチュン (周文中)、イタリアに本社を置く楽譜出版社リコルディ、これら楽譜を出版するにあたって中心となったと考えられる人々の間で、楽譜上の表記にフランス語と英語の表記が混在しており、どの言語をメインとするのかが統一されていないことが、演奏者にとっては混乱を招く原因のひとつである。ヴァレーズはどの言語で楽器名を書いたのか、英語で書いた場合にフランス語との相違はなかったのか、自筆譜を検証することで問題の解消に導くことが可能であろう。

このような問題に直面した場合、同じ作曲家の複数の作品を見渡すことで、作曲家の勘違いであるのか、出版社の間違いであるのかを判断する材料を増やし、適切な楽器を選ぶことが求められる。しかし、演奏者の労働状況からみると、演奏しない作品までを見渡すには十

分な時間があるとは言えない。加えて近現代の作品の多くはレンタル制度が適用されていることから、楽譜を目にすることも容易ではない。したがって、多くの疑問点を抱える作品については、本発表のような形で演奏者、演奏団体、研究者が記録を蓄積していくことが、打楽器をはじめ特殊な楽器を使用する作曲家の作品を演奏していく上では重要となってくる。

そして、作曲家は特殊な楽器を使用する場合や自らの望む音にこだわりがある場合においては、楽器の写真やメーカー、型番を記載するなど詳細を楽譜に記しておくことが、自作の再演において、望ましい形となって演奏されることになるであろう。

〔補足 ヴァレーズ作品の演奏に関して〕

- ・ 演奏にあたってはパーカッション・スコアがあるとよい  
楽器ごとに分けられたパート譜や、パート単体のパート譜では他のパートとの関係性が見えず、アンサンブルが困難になることから、打楽器セクション全体を書いた楽譜が必要となる。
- ・ ヴァレーズは1つの楽器を2~3名の奏者が持ち変えるよう指示を出しているが、実際には難しく、例えば Field drum(Snare OFFにして Tenor drum)は4台必要となった。

参考文献 網代景介・岡田知之 共著『新版 打楽器事典』(1981/新版 1994) 音楽之友社  
沼野雄司『エドガー・ヴァレーズ 孤独な射手の肖像』(2019) 春秋社

## ヴァレーズ作品 打楽器セクション写真集

シンフォニエッタ 静岡  
第75回定期公演

2023年10月5日(金)  
三鷹市芸術文化センター 風のホール

©シンフォニエッタ静岡



Edgard Varèse: Offrandes



Edgard Varèse: Hyperprism



Edgard Varèse: Intégrales



Edgard Varèse: Déserts



Edgard Varèse: Nocturnal

お問い合わせ：シンフォニエッタ 静岡 [fukumimissj@gmail.com](mailto:fukumimissj@gmail.com)  
TEL 090 (9940) 6995